

## 添い寝が対人依存—依存容認に及ぼす影響

吉田 美奈<sup>1)</sup>・浜崎 隆司<sup>2)</sup>・上岡 紀美<sup>3)</sup>

### A study of the effects of co-sleeping on the Interpersonal Dependency—Dependency Acceptance

The purpose of this study is to investigate the relationship between the dependency and co-sleeping or Interdependency and co-sleeping. A questionnaire survey was taken by 607 undergraduate and graduate students. We performed factor analysis and developed an Interpersonal Dependency-Dependency Acceptance Scale, consisting of 4 sub-scales; Affectional Dependency Acceptance, Instrumental Dependency Acceptance, Affectional Dependency and Instrumental Dependency. Both Cronbach's alpha coefficient and correlation coefficient with the other Scales were sufficient to support the reliability of the Scale. Based on the results of factor analysis we examined the relationship between the dependency and co-sleeping. As results of analysis of variance it was evident that those who have the experience of co-sleeping have higher sense of Dependency, and higher score of Instrumental Dependency and Affectional Dependency Acceptance. It was suggested that the experience of co-sleeping increases Dependency, and those who have the experience of co-sleeping formed Interdependency relationship. Those who had quitted co-sleeping after being 4year-old have higher score of Affectional Dependency Acceptance.

#### 1. 問題と目的

添い寝は子どもの育ちにどのような影響を与えるのだろうか。アメリカでは子どもの自立心を育てるために一人寝をさせることが重要であると考えられている (Morelli & Tronick, 1992)。一方日本では、子どもには従順できまりに従い、行儀がよいなど家族と一緒にいるのに差しさわりのない性質を持つことが望まれており (東, 1994)、親と一緒に寝ることは、乳児が相互依存的な関係を持つことができるような人間へと変容していくことを促す働きをされると考えられている (Caudill & Weinstein, 1969)。

このように、日本とアメリカでは子どもに期待する性質や就寝形態に対する考え方に大きな違い

が見られる。子どもの就寝形態の主流が異なるのは、そのためでもあろうと推察される。アメリカでは、よく映画などでも見られるように生後早い段階から子ども部屋を与えられるのであるが、筆者が行った2013年の実態調査では、日本では依然として添い寝が子どもの主流な就寝形態であることが伺えた。

ただ、添い寝に関して保護者が抱く悩みは多く、その内容も多岐にわたっている。「Yahoo知恵袋」や、「教えて! goo」などのインターネットサイトでは、「添い寝をしたほうがよいのか」「添い寝をしないほうがよい理由は」など、添い寝に対する考え方を問うような質問や、「添い寝と一人寝で性格はどうなるのか」「添い寝、添い乳をすると子どもがわがままになるのか」など、添い寝と子どもの性格の関連性を問うような質問、また「(体の向き、腕の位置など)添い寝の仕方を教えてほしい」「添い寝はいつまでならよいのか」など、添い寝の仕方に関する悩みなどが驚くほど多

1) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

2) 鳴門教育大学大学院学校教育学研究科

3) 仙台白百合女子大学人間学部人間発達学科

数寄せられている。したがって、本研究で添い寝が子どもの心理的発達にどのような影響を及ぼすかについて考えることには意義があるといえよう。

吉田 (2012) の調査では、添い寝が子どもの自立心の形成を阻害するという結果は示されなかったものの、依存心を高めることが示唆された。さらに、数井・遠藤 (2005) は、日本的な養育条件として子どもとの密接感を重視することをあげ、実質的には子どもの依存を奨励する傾向が否めないと指摘している。また、日本では部屋数があっても家族がかたまって寝る傾向にあると報告されており (森岡, 1973; 飯長・篠田・大久保・中野・大八木, 1985), これらの報告からは、添い寝が居住スペースといった環境的要因とは関係なく、子どもの就寝時における親の関わり方として重視されているということが読み取れる。これらの先行研究からは、日本の親が子どもとの密接な関係を重視し、親子のコミュニケーションの一つとして添い寝をしているとも考えられ、それゆえに、添い寝と依存の関わりが推測されるのである。

依存の定義を以下で概観してみたい。まず、高橋 (1968) は「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義した。辻 (1969) は「自己の要求または課題の実現のために他人に依存する」道具的依存と「自己の心情的な安定を他人との接触ないし連合そのものにもとめる」情動的依存に分けて考えている。関 (1982) は「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、依存性のあり方を①「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」である依存欲求、②「成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、又、相互依存的な、他者との良好な関係を保ち、かつ、そこから得た安定感を基礎として自立的になるために、必要不可欠な依存性である」統合された依存性、③「顕在的

には、文字通り、他者への依存を否定する形で現れるが、潜在的に、依存不安があると推定される態度」である依存の拒否の3点の組み合わせによって検討している。関の定義には高橋 (1968) と同様、道具的依存が含まれていない。田中・高木 (1997) は、依存要求を「自分の要求が、彼らの個別的あるいは具体的で道具的あるいは直接的な反応や行動により満たされる」道具的依存要求と「他者からの一般的あるいは抽象的で、心理的あるいは間接的な反応や行動により満たされる」心理的依存要求に区分している。竹澤・小玉 (2004) は、依存要求を情緒的・道具的依存を含めた「是認・支持・助力・保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにしたいという欲求」と定義した。

以上が依存を定義する主要な先行研究であるが、依存の定義が文献によりさまざまに異なるのがお分かりいただけるであろう。したがって、本研究を進めるにあたっては最初定義づけをしておく必要があると思われる。ほぼすべての先行研究において依存は複数の概念で構成されていると考えられているため、まずそこから始めたい。

岡山 (1982) は、乳幼児のように自分でできることが限られる場合には、道具的に、また情緒的にも依存しているが、自分でできることが増えてくると道具的な自立が始まり、それにしたがって情緒的な自立を見せる場面も現れてくると指摘している。確かに、乳幼児は食事や衣服の着脱に大人の手を借りるものであるし (道具的依存)、母親のそばで機嫌よく遊んでいた子どもが、そばを離れたとたんにくずったり泣き出したりしてしまうことはよくある (情緒的依存)。また、大人でも置かれた場面が変われば普段は自分でやっていることでも他者の手を借りようとするところがある。このように、依存には情緒的依存と道具的依存があってそれぞれが相互に関わりを持っており、場面に応じて優勢になる面も変わると考えられる。したがって、本稿では依存に「課題達成のために他者からの具体的助力を得ようとする」道具的依

存と「自分が困っているときや悩んでいるときに他者の反応や行動から精神的助力を得ようとする」情緒的依存があり、それらが相互に関わり合いながら存在するものと考えられる。

また、依存関係には一方的な依存関係と双方向の依存関係があり、自分が相手に依存しつつ、相手の依存も受け入れる双方向の依存関係は相互依存と呼ばれる。Fu, Hinkle&Hanna (1986)の研究では、個人の依存性と家族の相互依存性は相互に関連しており、それらは親の社会的強化や子どもへの養育態度を通じて次の世代へ伝えられるということが示唆されている。また、井上 (2001) は大学生を対象に行った調査で、子が親から情緒的に支えられていると感じるほど子の依存欲求が高いと指摘している。つまり、家族間で相互依存関係が成り立っている場合、そこで育つ子どもも他者に依存することを覚え、さらに親が子どもの情緒的依存を受け入れるほど子どもの依存性が高まるということではないか。

井上 (2001) の研究では依存欲求のどの側面が高くなるかについて明らかにされていないが、これらの研究結果と吉田 (2012) の調査結果を併せて考えると、添い寝経験がある者は親子の密接感が高く、親に支えられていると感じている可能性も高いため、家族への情緒的な依存欲求が高まる結果、他者への情緒的な依存も高まるのではないかと考えられる。また、添い寝をしている家族のように物理的にも心理的にも密接している場合、相手に一方的に依存するばかりの関係では、家族成員間の関係を良好に保つことは難しいであろう。したがって、そこには一方的な依存関係のみではなく、自分も依存しつつ相手の依存も受け入れる相互依存関係が自然と成立していることが推測される。

乳児期には自分でできることが限られている。久世・久世・長田 (1980) によれば、1歳半ごろまでは親への依存が中心で、親の指示・命令に従って行動するものであるが、複雑な感情が育ち自分の意思を言葉で表せるようになる3歳ごろか

らは自我が芽生え、精神的な自立の第一歩を踏み出すということである。

ただ、「依存性と自立性が互いに独立している (森下, 1988)」こと、および「依存的でないことは、独立的であることと同じではない (津守・稲毛, 1960)」ことから、旺盛な好奇心でさまざまなことに挑戦し、たくましく自分の世界を広げていくのがこの時期の子どもの成長する姿であっても、自立心が高まった分依存心が低くなっているはずだと考えるべきではないのであろう。「家庭と学校・職場とを行き来するように、依存と自立を繰り返すことによって、人間は円環的・螺旋的に成長していく」という山下 (1999) の依存と自立のサイクル論や、高橋 (2009) の「(依存要求と自立要求) 両方の要求を持つことが精神的に健康だといえるのである。」という見解からも、人間が乳児期からの依存心と自然に育ってくるはずの自立心とを併せ持ち、そのバランスを変えながら成長していくものだということが読み取れる。

子どもを養育する上で依存関係の形成は避けて通れないものである。岡山 (1982) は、「依存性がなかったら、まず第一に親子関係すら成立しがたいであろう。子どもは、親に依存的であるがゆえに、取り込み (introjection) のメカニズムや模倣を通して、親の感情や態度や価値観や行動パターンを、内化したり学習したりしてゆく」と述べている。津守・横山・磯部・下坂・仁科・長塚 (1961) は依存心の規定要因として「①依存が許容され、依存が強化されると依存は大となる②依存が拒否される場合、フラストレーションにより依存欲求が大となる。この場合、女兒の方が依存欲求のフラストレーションに対して一層敏感である③社会的要因として依存が承認される場合、依存は大となる。」の3点を明らかにした。つまり、子どもの依存を許容し過ぎても、拒否しすぎても依存心を大きくしてしまうということであり、これらの知見からは依存心の形成における親の養育態度の影響の大きさが容易に理解できる。さらに、

津守・稲毛（1960）によって乳児期に母子の接触度が大きいとしても幼児期の依存にはつながらないことが明らかにされたことから、幼児期、なかでも3歳以降における親の養育態度のあり方の重要性が推察されるのである。

高橋（2009）の「一般的に依存が幼稚で自立心が尊いとされる」という見解を裏付けるように、インターネット上においては添い寝と子どもの性格（主に依存心・自立心）との関連性を問う質問が驚くほど多い。日本では添い寝が就寝時における親子の関わり方として重視され、密接感を重視する親子のコミュニケーションの一つとして選択されているからこそ、添い寝と依存心の関係を明らかにし、子離れや親子間の心理的距離について考察することには意義があると言えるのではない。そこで本研究では、添い寝経験と依存欲求の関係、および添い寝経験と相互依存関係の成立について明らかにすることを目的とする。

弓削（2004）によれば、年少児でも一緒に遊ぶなどの行動を通じて相互依存性の高い関係を構築することは可能である。しかし、親から独立し、社会性を身につけるのは青年期である（久世・久世・長田，1980；山下，1999）ことから、本調査では調査対象を青年とした。

また、性差および添い寝のしかたによる影響についても検討したい。男性と女性の心理的相違として一般的に持ち出されるのが、男性は自立的で、女性が依存的であるというものである（中塚・清重，2008）。同論文では、自立偏重の考え方に否定的な立場を示しつつ、研究結果として、男性は女性に比べより自立的で、女性は男性に比べより依存的であることが報告されている。さらに、津守・横山・磯部・下坂・仁科・長塚（1961）の報告でも、「依存は女兒に大」とされている。これらの報告から、自立心や依存心についての結果に性差が表れることが予想される。就寝形態が子どもの自立心の形成に与える影響について、篠田（2009）は添い寝時の子どもと親の位置関係による違いを指摘している。この報告によると、母親

中央型の川の字で就寝する子どもは情緒的に安定し、社会性や自立心が育つこと、子ども中央型の川の字で就寝する子どもは情緒が安定するが、社会性や自立心は遅れがちであること、そして親と別室で就寝する子どもは、情緒が安定しないが自立心は強いということを述べている。

本調査では、上記仮説を検証するため、添い寝経験により情緒的依存／道具的依存のどちらが高まるのかを測定する。同時に、相互依存関係の成立を検証するために他者からの依存の受け入れ度を測定する尺度（対人依存－依存容認尺度）を作成し、信頼性・妥当性を検討する。妥当性については、基準関連妥当性から検討する。

子どもの人間関係は、母親を中心とした家族との結びつきを基礎とし、次第に仲間、異性など広い範囲の他者との間に関係を広げていく（井上・久保，2001）。したがって、他者への依存欲求と親への依存欲求には正の相関関係があると考えられる。同様に、他者の依存欲求の容認度と親の依存欲求の容認度も正の相関を示すと考えられる。子の親への依存を測る加藤・高木（1980）の独立意識尺度のうち、「親への依存性」尺度には情緒的な面を測る項目が多いため、情緒的依存欲求尺度とより強い相関が得られると推測される。親からの依存欲求が子が受け入れる度合いを測る広瀬（2007）の心理的離乳尺度のうち、「親が子を頼りにする親子関係」尺度にも情緒的な面を測る項目が多いため、情緒的依存欲求容認尺度とより強い相関が得られると予測される。そして、因子分析で得られた結果を基に分散分析を行い、添い寝が影響を及ぼす依存欲求について考察する。

## 2. 方法

**対象** T県およびN県の大学に通う学生670名。回答に不備のあるものを除いた分析対象は男性312名、女性340名の合計652名。

**収集の手続き** 選択式と記述式の両方を含む質問紙（無記名）を配布し、回答を依頼した。調査は2012年12月～2014年8月にかけて、大学の授業

時間のうち15分程度を利用して行った。回答を依頼するにあたり、調査の目的と内容、調査により個人が特定されることはなく、個人情報の保護が順守されること、回答は強制されるものではなく、参加は任意であることを説明した。

**項目の内容** 年齢・性別や添い寝経験の有無、添い寝の位置関係などの質問と、依存欲求に関する質問の計58項目が含まれている。まず、性別・年齢・添い寝経験の有無を尋ね、添い寝経験があると答えた者に対しては、いつまで添い寝をしてもらっていたか、添い寝の位置関係などについて質問した。そして、添い寝経験がある者となない者の両方に対し1～50までの質問項目への回答を依頼した。回答は各尺度に対し「5：非常にあてはまる、4：どちらかというにあてはまる、3：どちらともいえない、2：どちらかというにあてはまらない、1：全くあてはまらない」の5件法とし、それぞれの項目に対してどのくらいそう思うか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

質問項目は、情緒的依存欲求および道具的依存欲求を測るための尺度として、竹澤・小玉（2004）の「対人依存欲求尺度」を使用した。この尺度は「情緒的依存欲求尺度」10項目および「道具的依存欲求尺度」10項目からなる。情緒的依存欲求容認度および道具的依存欲求容認度を測るための尺度は、竹澤・小玉（2004）の「対人依存欲求尺度」を参考にして20項目作成した。例えば、「病気の時や、ゆううつなときには誰かに慰めてもらいたい」という文章であれば、「病気の人や落ち込んでいる人を支えてやりたいと思う」というような、回答者本人が頼られることを想定した内容のものにした。また、基準関連妥当性の検討のため、親への依存を測る尺度として、加藤・高木（1980）の独立意識尺度のうち「親への依存性」の部分の5項目、および親からの依存欲求を子が受け入れる度合いを測る尺度として、広瀬（2007）の心理的離乳尺度のうち「親が子を頼りにする親子関係」の部分の5項目を使用した。

### 3. 対人依存－依存容認尺度の作成

**対人依存－依存容認尺度の因子分析** 以下の統計処理はSPSS Statistics Version20を用いた。「親への依存性尺度（項目番号21～25）」および「親が子を頼りにする親子関係尺度（項目番号26～30）」は妥当性の検証のために用意したものであるため、因子分析は竹澤・小玉（2004）の「対人依存欲求尺度」20項目（項目番号1～20）、そしてこの「対人依存欲求尺度」を参考に作成した「情緒的依存欲求容認尺度」および「道具的依存欲求容認尺度」（項目番号31～50）の計40項目について行った。これら40項目のうち、天井効果を示した1項目（項目番号32）を除き、項目ごとの粗点をそれぞれ項目得点として主因子法、固有値1以上でプロマックス回転による因子分析を行ったところ、6因子が抽出された。いずれの因子にも、.40以上の負荷がかからなかった項目および1項目のみとなった第5因子、第6因子の項目を削除し、再度同じ条件で因子分析を行った結果、5因子が抽出された。いずれの因子にも、.40以上の負荷がかからなかった項目および複数の項目に対し、.40以上の負荷がかかっていた項目を削除し再度因子分析を行ったところ、最終的に4因子が抽出された（Table1）。

Table1 依存-依存容認尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

項目番号	質問項目	想定 カテゴリー	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
<b>第1因子 道具的依存欲求容認 (α = .90)</b>							
46	忙しいを手伝おうとする	道・容	.82	-.04	-.02	-.02	.63
43	難しい仕事を一緒にやってくれと頼まれたら引き受ける	道・容	.78	-.01	-.10	-.11	.52
42	面倒な仕事をしているを手伝ってやろうとする	道・容	.75	-.06	.03	.01	.57
45	体調が悪くなった人の仕事を代わりに引き受けてやる	道・容	.75	-.01	-.00	-.05	.54
50	一人では片づけられない仕事を抱えた人を手伝ってやる	道・容	.75	-.04	.06	.06	.62
44	誰かが重要な知らせを受け取る時には、そばにいてやろうとする	道・容	.59	.17	-.04	-.04	.41
48	分からないことがある人には教えてやろうとする	道・容	.58	-.02	.13	.05	.46
49	探し物を手伝ってやる	道・容	.52	.01	.18	.02	.45
47	誰かに意見を求められたら助言する	道・容	.52	.02	.07	.05	.34
<b>第2因子 情緒的依存欲求 (α = .86)</b>							
3	困っているときや悲しい時には、誰かに気持ちをわかってもらいたい	情	-.03	.78	.04	-.06	.60
5	何かやろうとする時には、誰かに励まされたり、気づかしてもらいたい	情	.11	.76	-.22	.08	.54
2	いつも誰かに見守っててもらいたい	情	-.08	.73	.07	-.11	.50
4	悩み事があるときは、誰かにアドバイスしてもらいたい	情	-.01	.69	.01	-.05	.45
1	病気の時や、ゆううつなときには誰かに慰めてもらいたい	情	-.09	.65	.16	-.05	.47
10	困っているときには、誰かに助言してほしい	情	.02	.56	.01	.19	.45
7	人から「元気？」などの気配りの言葉が欲しい	情	.02	.55	.02	.03	.34
9	病気の時、誰かに世話をしてほしい	情	.12	.45	-.02	.14	.32
<b>第3因子 情緒的依存欲求容認 (α = .89)</b>							
31	病気の人や落ち込んでいる人を支えてやりたいと思う	情・容	.01	-.03	.76	-.01	.56
33	誰かが困っているときや悲しんでいるときには、その気持ちを理解しようとする	情・容	.08	.06	.71	-.04	.63
36	誰かが自分と一緒にいたいと望むときにはできるだけそばにいてやろうとする	情・容	.01	.07	.71	-.01	.56
35	何かやろうとしている人のことを励ましたり、気づかたりする	情・容	.05	.05	.66	.03	.52
37	人に「大丈夫？」など気配りの言葉をかける	情・容	.10	-.03	.65	.04	.51
38	誰かに一緒に行ってほしいと頼まれたら、できるだけ一緒に行こうとする	情・容	.10	-.04	.62	.04	.47
39	病気の人をみると、看病してやりたいと思う	情・容	.21	-.00	.59	-.05	.54
<b>第4因子 道具的依存欲求 (α = .80)</b>							
16	忙しい時には誰かに手伝ってほしい	道	-.02	-.10	.03	.80	.59
12	面倒な仕事は誰かに手伝ってほしい	道	-.04	-.02	-.07	.70	.47
13	難しい仕事を当てられるときには、誰かと一緒の方がよい	道	-.09	.04	.08	.66	.47
20	自分一人で片づけられない仕事があった時は、誰かに手伝ってほしい	道	.07	.05	-.00	.60	.40
15	体調が悪くなったときには、誰かに仕事を代わってほしい	道	.02	.07	-.02	.56	.35
注： 道・受=道具的依存欲求容認							
情=情緒的依存欲求							
情・受=情緒的依存欲求容認							
道=道具的依存欲求							
			因子間相関	因子1	因子2	因子3	因子4
				因子1	.35	.70	.13
				因子2		.50	.42
				因子3			.18
				因子4			
<b>削除項目</b>							
6	できることなら、いつも誰かと一緒にいたい。					MD	SD
8	できることなら、どこへ行くにも誰かと一緒に行きたい。					3.14	1.17
11	何か対応に迷うようなときには、誰かに対応の仕方を聞きたい。					2.87	1.15
14	何か重大な知らせを受け取る場合には誰かそばにいてもらいたい。					3.93	0.89
17	自分一人で決断しかねるときには、誰かの意見に頼りたい。					3.06	1.14
18	自分にはわからないことがあったら、誰かに教えてほしい。					3.73	0.99
19	探し物をしなければならぬとき、誰かに手伝ってほしい。					4.00	0.89
32	誰かの心の支えになりたいと思う。					3.37	1.08
34	悩んでいる人を見るとアドバイスしようと思う。				※天井効果による	4.12	0.91
40	困っている人がいれば、助言してやりたいと思う。					3.66	0.97
41	物事への対応の仕方を聞かれたときには教えてやろうとする。					3.69	0.90
						3.93	0.80

第1因子は「忙しい人を手伝おうとする」「難しい仕事を一緒にやってくれと頼まれたら引き受ける」など9項目から構成されている。これらはすべて道具的依存欲求容認であると想定した項目であったため、道具的依存欲求容認と命名した。第2因子は「困っているときや悲しい時には、誰かに気持ちをわかってもらいたい」「何かやろうとする時には、誰かに励まされたり、気づかしてもらいたい」など8項目から構成されている。これらはすべて情緒的依存欲求であると想定した項目であったため、情緒的依存欲求と命名した。第3因子は「病気の人や落ち込んでいる人を支えてやりたいと思う」「誰かが困っているときや悲しんでいるときには、その気持ちを理解しようとする」など7項目から構成されている。これらはすべて情緒的依存欲求容認であると想定した項目であったため、情緒的依存欲求容認と命名した。第4因子は「忙しい時には誰かに手伝ってほしい」「面倒な仕事は誰かに手伝ってほしい」など5項目から構成されている。これらはすべて道具的依存欲求であると想定した項目であったため、道具的依存欲求と命名した。因子間相関をみると、道具的依存欲求容認と情緒的依存欲求容認に高めの正の相関 ( $r=.70$ ) が、情緒的依存欲求と情緒的依存欲求容認 ( $r=.50$ ) および情緒的依存欲求と道具的依存欲求 ( $r=.42$ ) には中程度の正の相関がみられた。道具的依存欲求容認と情緒的依存欲求には弱い正の相関 ( $r=.35$ ) がみられた。

#### 4. 依存—依存容認尺度の信頼性・妥当性

信頼性に関しては、 $\alpha$ 係数を算出したところ、尺度全体では $\alpha=.91$ 、第1因子（道具的依存欲求容認）では $\alpha=.90$ 、第2因子（情緒的依存欲求）では $\alpha=.86$ 、第3因子（情緒的依存欲求容認）では $\alpha=.89$ 、第4因子（道具的依存欲求）では $\alpha=.80$ であった。また、再検査法（1か月、114名）による信頼性係数は、「情緒的依存欲求」で0.72、「道具的依存欲求」で0.70、「情緒的依存欲求容認」で0.71、「道具的依存欲求容認」で0.62、

尺度全体で0.73という高めの正の相関を示した。

妥当性について、第1因子（道具的依存欲求容認）、第3因子（情緒的依存欲求容認）と「親が子を頼りにする親子関係尺度」（Table2）および第2因子（情緒的依存欲求）、第4因子（道具的依存欲求）と「親への依存性尺度」との相関係数（Table3）を求めた。道具的依存欲求容認、情緒的依存欲求容認と「親が子を頼りにする親子関係尺度」は有意な正の相関 ( $r=.20$ ,  $**p<.01$ ;  $r=.17$ ,  $**p<.01$ ) を示した。また、情緒的依存欲求、道具的依存欲求と「親への依存性尺度」との相関係数も有意な正の相関 ( $r=.44$ ,  $**p<.01$ ;  $r=.24$ ,  $**p<.01$ ) を示した。以上から、各下位尺度の基準関連妥当性が確認された。

Table2 親が子を頼りにする親子関係尺度（広瀬；2007）と各尺度の相関係数

親が子を頼りにする親子関係	
情緒的依存欲求容認	0.17**
道具的依存欲求容認	0.20**

\*\* $p<.01$

Table3 親への依存性尺度（加藤・高木；1980）と各尺度の相関係数

親への依存性	
情緒的依存欲求	0.44**
道具的依存欲求	0.24**

\*\* $p<.01$

#### 5. 添い寝が影響を及ぼす依存欲求の性質についての研究

条件群の設定 因子分析の結果に基づいて作成した尺度を使用し、質問紙調査を行った。分析するにあたり、まず添い寝経験のある者と添い寝経験のない者に分けた。添い寝経験のある者については、添い寝の位置別に4群（両親の間、母親の隣、父親の隣、その他に分類される者の隣）に分けたほか、添い寝をしなくなった時期別に3群（0～3歳、4～5歳、6歳以上）に分けた。本調査において、その他に分類された者は「きょうだいまたは祖父母」のみであった。以下で分散分析を行うにあたり、因子分析の結果に基づいて条件群ご

とに各因子を構成する項目の合計得点を算出し、その平均値とSDを求めた。

**添い寝経験と性差** 添い寝経験の有無および性差を独立変数として2要因の分散分析を行った (Table4)。分析対象者は652名 (男性312名, 女性340名) であった。

道具的依存欲求尺度においては添い寝経験に有意な主効果がみられ、添い寝経験のない者に比べ、添い寝経験のある者の道具的依存欲求得点が有意に高かった ( $F(1,648) = 4.24, p < .05$ )。情緒的依存欲求容認尺度においては、添い寝経験の主効果に有意傾向がみられ ( $F(1,648) = 2.87, p < .10$ )、添い寝経験のない者に比べ、添い寝経験のある者の情緒的依存欲求容認得点が高い傾向にあった。また、道具的依存欲求容認尺度、情緒的依存欲求尺度および情緒的依存欲求容認尺度においては性差に有意な主効果がみられ、男性に比べ女性の得点が有意に高かった ( $F(1,648) = 23.11, p < .001$ ;  $F(1,648) = 27.01, p < .001$ ;  $F(1,648) = 40.63, p < .001$ )。

しかし、いずれの尺度においても添い寝経験と性差に有意な交互作用はみられなかった。

**添い寝の位置と性差** 添い寝の位置と性差を独立変数として2要因の分散分析を行った (Table5)。分析対象者は413名 (男性171名, 女性242名) であった。

道具的依存欲求容認尺度、情緒的依存欲求尺度および情緒的依存欲求容認尺度においては性差に有意な主効果がみられ、男性に比べ女性の得点が有意に高かった ( $F(1,405) = 7.54, p < .01$ ;  $F(1,405) = 9.82, p < .005$ ;  $F(1,405) = 6.39, p < .05$ )。しかし、すべての尺度において添い寝の位置に有意な主効果はみられず、添い寝の位置と性差に有意な交互作用はみられなかった。

**添い寝の期間と性差** 添い寝の期間と性差を独立変数として2要因の分散分析を行った (Table6)。分析対象者は238名 (男性104名, 女性134名) であった。

Table4 添い寝経験と性別ごとの各尺度の平均値 (SD)

	添い寝経験あり		添い寝経験なし		添い寝経験 F値	性差 F値	交互作用 F値
	男性 (n=212)	女性 (n=273)	男性 (n=100)	女性 (n=67)			
道具的依存欲求容認	3.59 (0.70)	3.91 (0.65)	3.53 (0.70)	3.82 (0.77)	1.34	23.11****	0.04
情緒的依存欲求	3.36 (0.71)	3.74 (0.66)	3.31 (0.83)	3.63 (0.90)	1.53	27.01****	0.13
情緒的依存欲求容認	3.77 (0.71)	4.15 (0.60)	3.64 (0.79)	4.07 (0.83)	2.87†	40.63****	0.14
道具的依存欲求	3.68 (0.74)	3.73 (0.74)	3.59 (0.80)	3.53 (0.83)	4.24*	0.00	0.63

\*\*\*\* $p < .001$ , \*\*\* $p < .005$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

Table5 添い寝の位置と性別ごとの各尺度の平均値 (SD)

	両親の間		母親の隣		父親の隣		その他		添い寝 経験 F値	性差 F値	交互作用 F値
	男性 (n=37)	女性 (n=27)	男性 (n=85)	女性 (n=144)	男性 (n=25)	女性 (n=38)	男性 (n=24)	女性 (n=33)			
道具的依存欲求容認	3.68(0.90)	3.87(0.95)	3.55(0.69)	3.93(0.69)	3.53(1.05)	3.59(0.87)	3.45(0.95)	3.87(0.89)	0.98	7.54**	0.78
情緒的依存欲求	3.41(0.68)	3.55(1.00)	3.32(0.80)	3.79(0.70)	3.12(0.92)	3.61(0.88)	3.51(0.94)	3.60(0.89)	0.88	9.82***	1.24
情緒的依存欲求容認	3.87(0.69)	4.01(0.92)	3.76(0.76)	4.14(0.67)	3.83(0.95)	3.96(0.99)	3.79(1.03)	4.11(0.93)	0.07	6.39*	0.47
道具的依存欲求	3.87(0.73)	3.62(0.96)	3.55(0.85)	3.75(0.76)	3.46(1.15)	3.63(0.92)	3.51(0.92)	3.66(1.03)	0.70	0.44	1.03

\*\*\*\* $p < .001$ , \*\*\* $p < .005$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$



Table6 添い寝の期間と性別ごとの各尺度の平均値 (SD)

	0～3歳まで添い寝		4～5歳まで添い寝		6歳をこえて添い寝		添い寝の期間	性差	交互作用
	男性 (n=28)	女性 (n=24)	男性 (n=39)	女性 (n=35)	男性 (n=37)	女性 (n=75)	F値	F値	F値
道具的依存欲求容認	3.37 (0.86)	3.84 (0.95)	3.67 (0.91)	3.81 (0.86)	3.68 (0.94)	3.98 (0.80)	1.15	6.13*	0.62
情緒的依存欲求	3.26 (0.76)	3.66 (0.92)	3.32 (0.77)	3.83 (0.87)	3.29 (1.06)	3.77 (0.87)	0.28	13.88****	0.08
情緒的依存欲求容認	3.51 (0.71)	4.00 (0.92)	3.96 (0.88)	4.15 (0.84)	3.97 (0.90)	4.15 (0.86)	2.84†	5.76*	0.71
道具的依存欲求	3.59 (0.72)	3.51 (0.93)	3.61 (0.81)	3.72 (0.84)	3.58 (1.05)	3.59 (0.90)	0.27	0.01	0.20

\*\*\*\* $p < .001$ , \*\*\* $p < .005$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ 

情緒的依存欲求容認尺度において添い寝の期間の主効果に有意傾向がみられた ( $F(1,648) = 2.87, p < .10$ )。Ryan法による多重比較をおこなったところ、0～3歳まで添い寝をしていた者に比べ、6歳をこえて添い寝をしていた者の情緒的依存欲求容認得点が有意に高かった ( $t(232) = 2.11, p < .05$ )。また、0～3歳まで添い寝をしていた者に比べ、4～5歳まで添い寝をしていた者の情緒的依存欲求容認得点が高い傾向にあった ( $t(232) = 1.90, p < .06$ )。それに対し、4～5歳まで添い寝をしていた者と6歳をこえて添い寝をしていた者の情緒的依存欲求容認得点に有意差はみられなかった。道具的依存欲求容認尺度、情緒的依存欲求尺度および情緒的依存欲求容認尺度においては性差に有意な主効果がみられ、男性に比べ女性の得点が有意に高かった ( $F(1,232) = 6.13, p < .05$ ;  $F(1,232) = 13.88, p < .001$ ;  $F(1,232) = 5.76, p < .05$ )。いずれの尺度においても添い寝の期間と性差に有意な交互作用はみられなかった。

## 6. 考察

本研究の目的は、添い寝経験と依存欲求の関係、および添い寝経験と相互依存関係の成立について明らかにし、子離れや親子間の心理的距離について考察することであった。そのため、因子分析後のデータから添い寝の有無、位置および期間によって依存欲求のどの側面が高まるのかについて考察した。本調査の分析対象者全体に占める添い寝あり群の割合は74.4%であった。吉田・浜崎

(2013)の結果でも、全体に占める添い寝あり群の割合は74.4%であり、本調査の被験者が乳幼児であった1980年代半ば～1990年代初めごろにおいて添い寝が主流の就寝形態であったことが確認された。

**道具的依存欲求尺度** 添い寝の位置や期間および性差の効果は認められなかったが、添い寝経験の効果が見られ、添い寝経験のある者は、添い寝経験のない者に比べ道具的依存欲求得点が高かった。吉田・浜崎(2013)の研究でも、同様の結果が示されている。夜間の添い寝によって道具的依存欲求が高くなるという結果が出たことについては、夜間子どもが空腹やおむつが濡れたことからくる不快感、暗闇・雷鳴などへの恐怖を感じた時、それらを速やかに取り除く親の応答性の良さが子どもの依存欲求の高まりにつながっているという可能性が考えられる。不快感や恐怖など、子どもが自分一人では乗り越えられない心理状況に直面した時、親は授乳したりおむつを取り替えたりなどして不快感を取り除いてやったり、優しく声をかけ、体をトントンと叩いて恐怖を和らげてやったりする。滝川(2006)は、啼泣→不快の除去(⇒快)の積み重ねにより、乳児の啼泣はしだいに不快を除くための能動的な働きかけの色彩を帯びてくると指摘している。したがって、このような「訴えれば叶う」経験を積み重ねることにより、子どもは親に道具的に依存するようになっていくのではないだろうか。数井・遠藤(2005)は、日本的な養育条件として親が子どもとの密接感を

重視することをあげている。そして、実質的には子どもの依存を奨励する傾向が否めないと指摘している。この指摘からは、子どもとの密接感重視による親の応答性の良さが過干渉につながり、子どもを依存させる傾向にあるとも考えられる。本尺度において性差がみられなかったことについて、辻 (1969) は道具的依存には性差がないと指摘している。情緒的な支えを得たいという欲求に比べ、困っているときや悩んでいるときに具体的な援助を得たいという欲求は、男女を問わず受け入れられやすいのかもしれない。

**道具的依存欲求容認尺度** 添い寝経験や添い寝の位置、期間の効果は認められなかったが、性差の効果がみられ、男性に比べ女性の道具的依存欲求容認得点が高かった。道具的依存欲求容認尺度は、「一人では片づけられない仕事を抱えた人を手伝ってやる」というように、他者の課題達成や困難の克服のために具体的な援助を行う度合いを測るものである。本研究の結果から、女性が他者に対して「(何かを) してあげたい」という支え意識を抱いた時には、援助として具体的な援助行動に移している可能性がより高いといえるのではないかと考える。多治見 (1997) によれば、女性は愛する者のため、時には守るべき自分の立場や感情、体力を越えて他者に尽くしてしまうという。そして、女性にとっては夫などの他者に従属し、尽くすことが文化の潜在的なメッセージであるとも述べている。その一方で、男性にとっては奉仕することは情けないことなのであるとも指摘している。つまり、この結果は女性が抱く他者への支え意識の高さと実行可能性を示す一方で、性役割意識の違いやまめまめしく他者の世話を焼く女性が評価されるなどの社会的要因によって、依存に対する価値観の違いが点差となって表れた可能性があるのではないだろうか。

**情緒的依存欲求尺度** 添い寝経験や添い寝の位置および期間の効果は認められなかったが、性差の効果がみられ、男性に比べ女性の情緒的依存欲求得点が高かった。情緒的依存における性差につい

ては、男性に比べ女性の依存の度合いの高さが指摘されている (辻, 1969; 関, 1982; 竹澤・小玉, 2004など)。多治見 (1997) は、女性にみられる他者への従属性について述べたうえで、男性にとって (女性のように従属し) 主体性がないことは情けないことであると指摘している。この結果には、男性に比べ女性の情緒的な依存が受け入れられやすい一方、男性に対しては自立が望まれる傾向にあるという社会的要因や、男性は女性に比べて人に頼らず行動するもの、などの依存に対する一般的な考え方の違いが表れているのかもしれない。

**情緒的依存欲求容認尺度** 添い寝の位置の効果は認められなかったが、添い寝経験、添い寝の期間および性差の効果がみられ、添い寝経験がある者は、添い寝経験のない者に比べ情緒的依存欲求容認得点が高い傾向にあった。子どもと添い寝をしていると、布団の中で子どもがその日あった出来事を話してくれたり、昼間は聞けなかった本音を聞かせてくれたりすることがあるという。そんな時には子どもの気持ちを受け止め、慰めたり励ましたりすることもできるであろう。また、添い寝をしていれば、夜間に子どもが体調を崩しても親が速やかに対処できる。子どもの訴えを聞いて薬を飲ませるなどした後は、慰めて寝かしつけるものである。このような相互行為の繰り返しにより、子どもは他者をいたわり、慰めることを覚えていくのではないだろうか。0~3歳まで添い寝をしていた者に比べ、4~5歳までおよび6歳をこえて添い寝をしていた者の情緒的依存欲求容認得点が高かったことについては、子どもが親の行動規範を取り入れ根付かせるためには、親が家族をいたわったり、励ましたりする行為により多く触れることが必要なのであると推測される。また、男性に比べ女性の情緒的依存欲求容認得点が高かったことについては、情緒的依存欲求容認尺度は、「病気の人や落ち込んでいる人を支えてやりたいと思う」というように他者が困っているときや悩んでいるときに精神的助力を与えようとする

度合いを測るものであり、この結果は女性が他者に対して抱く支え意識の高さを示しているのではないだろうか。

## 7. まとめ

今回の調査では、添い寝経験により依存欲求のどの側面が高まるのか、また、添い寝経験により相互依存関係が成立するののかについて考察した。その結果、添い寝経験と道具的依存欲求および情緒的依存欲求容認との関係が示唆された。

添い寝経験により、家族への情緒的な依存欲求が高まることを通じて他者への情緒的な依存も高まると予測していたが、本調査結果では、添い寝経験により他者への道具的依存欲求が高まることが示された。応答的な添い寝によって、子どもは訴えれば叶えられるという体験を積み重ねる。親をはじめとする大人との相互行為の積み重ねにより、子どもは満たされ、安心感を得る。そうして安全基地を得た子どもは、積極的な探索行動を拡大し、自立へと向かっていく。その一方、親に訴えて何かをしてもらうという経験の繰り返しは道具的な依存心を芽生えさせたとも考えられる。そのため、添い寝経験により情緒的依存欲求ではなく、道具的依存欲求が高まったのではないだろうか。

また、添い寝経験により、他者に依存し他者による依存も受け入れる形の相互依存関係を成立させることができるようになって考えていたが、添い寝経験のある者は、他者に道具的に依存し他者の情緒的依存を受け入れるという形の相互依存関係を成立させていることが示唆された。添い寝経験がある者の依存欲求については上述したが、他者の依存欲求の受け入れについて、道具的依存欲求容認ではなく、情緒的依存欲求容認の度合いが高まることについては、回答者の添い寝経験が子ども側のものであり、主に「訴えて何かをしてもらう」側であったことによるものと考えられる。子ども側の添い寝時の経験としては、訴えに応じて何かをすることよりも、親が自分たち家族をい

たわったり、励ましたりする行為に触れることの方が多かったのではないだろうか。そのため、道具的依存欲求容認ではなく、情緒的依存欲求容認の度合いが高まったのであろう。

本稿では、依存に「課題達成のために他者からの具体的助力を得ようとする」道具的依存と「自分が困っているときや悩んでいるときに他者の反応や行動から精神的助力を得ようとする」情緒的依存があり、それらが相互に関わり合いながら存在するものと仮定していた。分析の結果、情緒的依存欲求と道具的依存欲求に中程度の正の相関がみられたことから、情緒的依存欲求と道具的依存欲求はそれぞれが独立して現れるのではなく、相互に関わりを持って存在していると言えるであろう。

本研究においては、依存欲求および依存欲求容認の度合いに添い寝の位置による明確な差は見られなかった。しかし、篠田 (2009) では、母親中央型の添い寝では子どもの社会性や自立心が育ち、子ども中央型の添い寝では社会性や自立心の育ちが遅れるとされ、添い寝の位置による子どもの心理的発達の違いが明確にされている。

本研究と篠田 (2009) とでこのような違いがみられたことについては、分類方法の違いや両研究における回答者の就寝形態の違いがその要因として考えられる。篠田 (2009) では父子間の距離が重視されているため、「母親中央型」として示されているのは母親を挟む形で父親と子どもが位置する就寝形態である。

一方、本研究では回答者に「身体が接触する距離で常態的に就寝していた人物」を位置関係とともに図示するよう指示しており、父子の距離は特別視していない。「母親との添い寝」には①母親が端に位置し、その隣に子どもが一人または複数並ぶ形態、②母親の両隣に子どもが位置する形態、③母親の両隣に父親と子どもが位置する形態、④母子が添い寝し、父親別室の形態、という4パターンの回答が含まれることが予想されたのであるが、実際には①②の回答のみが見られ、篠田

(2009)の「母親中央型」を示す③の回答は見られなかった。

本研究が対象としていない「子ども別室型（一人寝）」を除き、篠田（2009）が「子どもの生きる力を育む寝かた」として推奨する「母親中央型」以外の就寝形態では、社会性、自立心ともに発達が未熟であるとされている。したがって、「母親中央型」の見られなかった本研究の回答者については依存欲求および依存欲求容認の度合いに添い寝の位置による明確な差が見られなかったという可能性も考えられる。また、これらの知見からは、父子の距離に重点を置いて添い寝を考えることの重要性も示唆されるのではないだろうか。

## 8. 今後の課題

本研究では、添い寝経験が他者との相互依存関係の構築に影響を及ぼす可能性が示唆された。ただ、これまでの調査結果では添い寝をする際におおよその期限を決め、適切なコミュニケーションをとりながら行うことの大切さが示されている。

まず、期限を決めて添い寝することについて、吉田・浜崎（2013）は、愛着の観点からは3歳まで応答的に添い寝をし、4歳ごろから一人寝をさせるのが最も好ましいが、5歳までに一人寝をさせる場合は親に拒絶されたという意識を持たせないう、子どもが嫌がらずに一人寝に向かおうとする心の準備ができたタイミングを見計らって慎重に行われる必要があると指摘している。同時に、望ましい養育態度として適度な心理的距離の重要性についても述べている。同じく篠田（2009）も「3歳までの乳幼児にとって、別室に寝かされることで時に感じる恐怖が情緒不安定の原因となるが、4歳からは時に恐怖を与える親との距離が子どもに自己を自覚し、自立を促す契機となる」と指摘している。また、浜崎・吉田（2015-a）は、添い寝に対して抱くイメージにはポジティブなものやネガティブなものがあり、ぬくもりや安心を感じている一方で就寝時における過度な密着状態を嫌う様子を明らかにしたうえで、子どもに

一人寝できる心の準備ができれば、添い寝に対してネガティブな感情を抱く前に一人寝できる環境を用意することを勧めている。

次に、添い寝時に適切なコミュニケーションをとることについて、浜崎・吉田（2015-b）は添い寝が就寝時における親のかかわり方として重視されてきたことを述べ、就寝に臨む子どもの心構えが表れる就寝儀式的性質を分析することにより、望ましい添い寝のあり方について考察を加えた。同研究では、添い寝時に少なくとも母親が「そばにいてくれる」など母親が添い寝時に果たす役割の重要性が示されると同時に「朝までずっと添い寝してくれる」と感じさせることの大切さも示された。また、不安を解消するためだけの就寝儀式ではなく、「絵本を読む」「おしゃべり」や「しりとり」など添い寝をしている人物とのコミュニケーションの要素が加わった積極的就寝儀式的習慣化の必要性について考察している。本研究では、さらに望ましい添い寝を考えるうえで父子間の距離を考慮することの重要性も示唆された。これまでに得られた知見と併せ、今後望ましい添い寝のあり方と養育態度を考える手がかりとしたい。

最後に、被依存尺度については、竹澤・小玉（2004）の「対人依存欲求尺度」と同じく2因子構造であることが示された。他者からの依存の受け入れ度合いを測る尺度についての研究はあまりなされていないため、表現の再検討に加え、他者との相互依存型の尺度の検討をしていくことが必要であろう。

## 引用文献

- 東 洋・日本人のしつけと教育:発達の日米比較にもとづいて・東京大学出版会・1994
- Caudill, W. & Weinstein, H・Maternal care and infant behavior in Japan and America・*Psychiatry*32・1969・12-43
- Fu, V.R., Hinkle, D.E. & Hanna, M.A・A three-generational study of the development of individual dependency and family

- interdependence. *Genetic, Social & General Psychology Monographs* 112 · 1986 · 153-171
- 浜崎隆司・吉田美奈・大学生の添い寝に対するイメージと思い出について・「鳴門教育大学研究紀要」30・2015-a・24-32
- 浜崎隆司・吉田美奈・添い寝時における就眠儀式についての研究：テキストマイニング法による自由記述の分析・広島大学学習開発学講座研究紀要「学習開発学研究」8・2015-b・182-191
- 広瀬康司・親からの自立と依存にまつわる葛藤と心理的離乳の過程との関係性の検討：大学生の葛藤様相について・立教大学臨床心理学研究1・2007・1-15
- 飯長喜一郎・篠田有子・大久保孝治・中野由美子・大八木美枝・家族の就寝形態の研究・家庭教育研究所紀要6・1985・43-64
- 井上健治・久保ゆかり・子どもの社会的発達・東京大学出版会・2001
- 井上忠典・青年期における親の養育態度と親との依存：独立の葛藤の関連・日本教育心理学会総会発表論文集43・2001・417
- 加藤隆勝・高木秀明・青年期における独立意識の発達と自己概念との関係・教育心理学研究28(4)・1980・336-340
- 数井みゆき・遠藤利彦・アタッチメント：生涯にわたる絆・ミネルヴァ書房・2005
- 久世敏雄・久世妙子・長田雅喜・自立心を育てる・有斐閣・1980
- Morelli, G.A. & Tronick, E.Z. · Efe Fathers :One among many? A comparison of forager children's involvement with fathers and other males. *Social Development* 1 · 1992 · 36-54
- 「子育て子育てLab」  
[http://sumai-smile.net/lab\\_01\\_kosodachi/theme\\_03/page\\_02.html](http://sumai-smile.net/lab_01_kosodachi/theme_03/page_02.html) (閲覧日：2017年1月9日)
- 森岡清美・家族周期論・培風館・1973
- 森下正康・児童期の母子関係とパーソナリティの発達・心理学評論31(1)・1988・60-75
- 岡山 超・人間形成と自立心：依存的人間から自立的人間への教育・児童心理36(1)・1982・1-14
- 篠田有子・子どもの将来は「寝室」で決まる・光文社・2009
- 関知恵子・人格適応面からみた依存性の研究：自己像との関連において・臨床心理事例研究9・1982・230-249
- 多治見朋子・性差観念と女らしさについての一考察・立命館産業社会論集33(2)・1997・67-80
- 高橋恵子・依存性の発達の研究：I. 教育心理学研究16(1)・1968・7-16
- 高橋恵子・依存と自立・心と社会40(1)・2009・50-55
- 竹澤みどり・小玉正博・青年期後期における依存性の適応的観点からの検討・教育心理学研究52・2004・310-319
- 滝川一廣・愛着の障害とそのケア・そだちの科学7・2006・11-17
- 田中 優・高木 修・中学生における社会的依存要求の特徴について・社会心理学研究12(3)・1997・151-162
- 辻 正三・「依存性テスト」の検討・人文学報67・1969・11-23
- 津守 真・稲毛教子・幼児の依存性に関する研究：依存性と親の養育態度および従順性の相互関連について・教育心理学研究7(4)・1960・210-220
- 津守 真・横山峰子・磯部景子・下坂雅子・仁科弥生・長塚和弥・親子関係と幼児のパーソナリティの発達・教育心理学研究9(3)・1961・129-145
- 中塚善次郎・清重友輝・男性性・女性性と自立・依存・美作大学・美作大学短期大学部紀要53・2008・33-38

山下一夫・生徒指導の知と心・日本評論社・  
1999

吉田美奈・添い寝が子どもの信頼感、自立心、依  
存心へ及ぼす影響について・鳴門教育大学修  
士論文・2012

吉田美奈・浜崎隆司・添い寝が子どもの愛着およ  
び自尊感情へ及ぼす影響・応用教育心理学研  
究30(2)・2013・29-37

弓削洋子・児童生徒の対人認知と学級集団構造と  
の関連性：児童生徒間の対人関係を媒介とし  
て・鳴門教育大学学校教育実践センター紀要  
19・2004・11-17